

---

# 戦姫の翼

ヤーゲンヴォルフ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦姫の翼

### 【Nコード】

N7708S

### 【作者名】

ヤーゲンヴォルフ

### 【あらすじ】

戦争をしよう、平和は怖い

## オープニング（前書き）

血が出ます。

内臓も出ます。

苦手な方は閲覧注意です。

## オーブニング

漆黒の闇の中を、やはり漆黒の何かが奔っていた。

灯りはない。月も出ておらず、星々の輝きは木々が遮り、森の中は真の闇に覆われている。

だが漆黒の者達は速度を緩める事無く、見えない筈の障害物を避けながら漆黒の森を疾走している。

彼らが向かう先には光があった。

森の中からは見えないが、空から見れば明々と見て取れる。この森林地帯には似合わぬ、人工の光であった。

彼らはソコに接近し、人工の光が見えると同時に光の届かぬ草陰に身を隠す。

人　それも全身に漆黒の軍服を纏い、手に銃を持った兵士である。顔には暗視ゴーグルを着けており、それのお陰で光のない世界を抜け出す事ができたのだ。

彼らは　三人の兵士は暗視ゴーグルを外し、腰に下げている雑囊の中にしまい込むと、光を避けるように、明るく照らし出す光源へと進んで行った。

彼らが進んで行った場所は、軍のキャンプである。

人工の光はキャンプ内を照らす明かりであると同時に、周囲を警戒するサーチライトの役目を果たしている。

だが彼らはその光を避けながら分散してキャンプの中に侵入すると、それぞれ分担された役目を実行し始めた。

まず一人が、無防備に歩いていた士官を後ろから羽交い締めにする、声を発する前に首の骨を折って絶命させる。

そしてその死体をテントの影に隠してから軍服を剥ぎ、その軍服を自ら着込み、何食わぬ顔でキャンプの中を闊歩した。

それを遠距離から見ていた彼の仲間、木の上から手にした狙撃

銃を構え、スコープの中に敵兵を捉える。

その間に、もう一人が警備兵の眼を盗んで各所にC4爆弾を仕掛け、その場から少し距離を置いた。

準備は整った。あとは実行するのみだ。

「そこ！ 警戒を怠るな！」

司令所の前に一人の士官が歩み寄り、警備をしていた兵士を怒鳴り付けた。

結構な美人　だが警備兵には見覚えのない顔だ。

警備兵はいつでも銃を構えられるように、ぶら下げている銃に手を掛けながら踵を鳴らし、空いている方の手で敬礼をした。

「申し訳ありません。　それで御用件は？」

「顔合わせだ。新しく着任したので申告に来た」

警備兵は彼女の言葉に眉を顰めた。記憶が正しければ、ここ一週間、このキャンプに人は来ていない筈だ。

「すいませんが、身分証明書を　」

警備兵が銃の引き金に手を伸ばしながら身分証明を要求した途端  
爆音が響き、キャンプ内を真昼のように照らし出した。

「なっ！？」

彼が驚き、その爆炎に気をとられた瞬間　。

ポアという湿った破裂音が響いた。

彼の頭蓋骨を砕いた銃弾は、そのまま彼の脳髄を侵入口から反対側へと連れ出し、一瞬にして彼の命を狩り取った。

まるで人形のように無様に斃れる警備兵に視線すら向けず、彼の目の前に立っていた女性士官は司令所の中に堂々と入る。

司令所の中は、今の爆発で混乱の極みに達していた。

そこに、味方の軍服を着た　しかし見知らぬ顔の女性士官が堂

々と入ってきた。

最初、司令所にいた誰もが、今の爆音の報告をしに来た兵士だと思っていた。だが、彼女の手に行っている物を見た途端、それは間違いであると気付く。

そして気付いた時には既に遅かった。

彼女は手にしたサイレンサー付きのコルトM1911を彼らに向けて、おもむろに撃ち始める。

撃ち出された45口径拳銃弾は確実に彼らの命を狩り取っていき、コルトがホールド・オープンした頃には司令所内に動く者はいなかった。

彼女は机の上に置かれていた書類を胸ポケットの中に捻り込むと、何食わぬ顔で司令所から出て、指定の場所に向かい始めた。

彼女が司令所内で殺戮を行っている間、外では銃撃戦が展開されていた。

急な敵襲に驚いた兵士達に9×19耗弾の嵐が襲い掛かり、うろたえる兵士に向けてウージーサブマシンガンを連射しているに、状況を把握した兵士が近寄ろうとするも、森の中から放たれた7・56耗弾がそれを阻止する。

わずか数分のうちにキャンプ内は混乱の極みに達し、それを機と見た男はウージーを連射しながら森の中に逃げ込む。

そしてそれを守るかのように樹上に居座っていた狙撃兵は武器を持ち換え、40耗グレネード弾をキャンプ内に撃ち込む。

彼が持っているグレネードランチャーはリボルディングタイプだったのか、発射されたグレネード弾の数は6発で、それが終わると彼も木から降りて、先に逃げた二人を追うように走りだす。

未だ状況を飲み込めていないキャンプの兵士達は彼らが逃げた事すら気付かず、ただ少しでも状況を把握しようとして狼狽するか、怪しいと思えた場所に向けて銃弾をばら撒いており、誰も彼らの事

を追おうとしなかった。

その間に逃げ出した3人は、あらかじめ用意していたゴムボートに乗り込むと、静かに陸から離して河川の中央にボートを移動させ、あるていど距離が離れたところでエンジンを始動させる。

ここからでもキャンプの混乱ぶりは見てとれる。もはや追って来る者はいないだろう。作戦は成功した。

「敵軍の軍服も似合いますな、少尉殿」

安堵の溜息を洩らしながら、狙撃銃を構えた男が笑いながら言う  
と、褒められた女性少尉も、

「当然でしょ？ 私は何を着ても似合うから」と笑いながら言った。  
その言葉を聞いて、狙撃銃を持った男とウージーを持った男が声を出して笑う。

作戦の成功で気を抜いていた彼らは、今までの緊張をほぐすように、お互いに冗談を言いながら、回収予定ポイントに向かっていた。  
無論、気を抜いているとはいえ、警戒を怠っているわけではない。  
現にウージーを持っている男は前方右を、狙撃銃を持った男は後方を、一番後ろに座っている少尉は前方を見晴らして乗っていた。

「冗談を言い合ってこそいるが、異常があれば即応できる。彼らはその技量と経験を持った兵士であった。

そして何の問題もなく、3人は回収予定ポイントに到着する。

回収予定ポイントには予定どおり、民間船に偽装した仲間の船が到着して、彼ら到着を待っていた。

彼らを視認した船は、彼らに向けてライトを点滅させて信号を送り、彼らもライトを点滅させて返信する。それを確認した船は、彼らを回収すべく、ゆっくりと船体を彼らに寄せる。

これで本当に任務完了だ。早く自分達の基地に帰って、冷えたビールで作戦成功の祝杯を上げよう。その場にいた誰もがそんな考えを思い浮かべた瞬間。

闇を切り裂く様な、数多の流れ星が彼らに襲い掛かった。

流れ星は漆黒の闇の中で輝くと、それから分離するかのようには跳び出し、光の尾を引きながら黒い川の中に水飛沫を上げながら消え去るか、あるいは船体に当たって火花を散らし、ほんの僅かながら漆黒の闇を照らし出す。

無論、光の正体は流れ星などというロマンチックなものではない。流れ星のように襲い掛かっている物の正体は、機関銃から放たれた曳光弾 発する光で撃ちながら照準を修正する為の弾 である。曳光弾は通常、3発に1発の割合で装填されているため、実際に跳んできている弾は見えている物より遙かに多い。

3人を回収しにきた船はあくまで民間用の船であるため、銃弾の嵐に耐える様な頑強な造りはしておらず、銃弾の嵐は船体を蜂の巣にしていき、逃げようと出てきた乗員まで撃ち殺し、遂に銃弾はエンジンを爆発させた。

爆発で真っ二つに折れた船体は盛大に炎を吹き上げながら、徐々に漆黒の川の中に沈んでいく。無論、なかにいた乗員も同様である。

「くそッ！ 特高の奴らだ！」

狙撃銃を持った男が叫び、手にしている狙撃銃のスコープに目を当てた。

目標は曳光弾を使っている為、その居場所は直ぐに解る。ようは銃弾が光り出しているところを見ればいいのだ。

はたして スコープの中には、一人の奇怪なシルエットが浮かびあがった。

人 なのは明白だが、その容姿は異様な物だ。

全身を漆黒の鎧で覆い隠し、その顔もガスマスクのような物で覆われて闇と一体化している。ただ、その眼 おそらく暗視装置の類 だけが赤く爛々と輝いている。

まるで中世の物語から跳び出してきた魔物のような異様さを持ちながら、その手にはM60を持ち、銃身加熱など微塵も気にせず、ひ

たすら連射を続けている。御伽噺の魔物と近代兵器の融合物 極上のジョークだと言えるが、それが目の前で銃撃しているとなれば話は別だ。

狙撃銃を持った男は、言い知れぬ恐怖感が全身を奔るのを感じながら照準を合わせる。そしてレティクルと魔物が重なった瞬間、魔物の背後から、何かが飛び上がった。

「ミサイルか!？」

少尉はそう叫びながらも、それは違うと、自分の中で既に結論付けていた。

今まで自分達を回収しようとしていた小型船ならいざ知らず、ゴムボート一隻にミサイルを使う莫迦がいるとは考えにくい。

では何か。おそらく信号弾の類だろう。もしかしたら仲間を呼んで、自分達をジワジワと追い詰めて捕獲するつもりなのかもしれない。

そう思い、ゴムボートのエンジンに手を伸ばす。

あれが何であれ、銃撃されているからには逃げるのが上策だ。狙撃銃があるとはいえ、現状の装備では機関銃を装備している化物に勝てる道理はない。

先ほどまで回収船に接近する為に切っていたエンジンに手を置く、発動機を引けば、それでエンジンは始動し始める。

その単純な行動を行おうと発動機に手を伸ばした瞬間

パンツと何かが手の甲を叩き、どういウわケダか、本らい手があるルベキ所に手が無く、代わりにシロい棒ジヨウのナにかガ手クビの間から伸び、まるで噴水のように赤い液体が

「あつあああああああああああああああああああ！」

耳を劈く様な悲鳴が周囲に響き、彼女の手から流れ落ちた赤い液体がボート周辺の水を赤く染めていく。

そしてそれと同時に、再び何か叩く様な音が響き渡り、狙撃銃を

構えていた男の頭頂部から弾が入り、顎を突き抜けてボートの底に穴を穿った。

狙撃銃が水中に落ち、忘れたかのように、少し間を置いてから男も水の中に落ちた。

彼が落ちたせいでゴムボートが大きく揺り動き、痛みで身体を支える事ができなかつた少尉が水の中に身を投じる。

無論、それを助けようと男は手を伸ばしたが、手が届く前に少尉の頭の一部が、まるでスイカのように弾け跳び、少尉は驚愕の表情を浮かべたまま、頭部の欠けた部分から何か灰色の物体を溢しながら黒い水の中に沈んでいった。

その間にも銃撃は続いており、尚且つ先ほど空いた穴のせいでボートが沈み始める。男は必死に手に持つウージーで川岸の化け物を撃つてはいたものの、効果は全くなく、化物は尚熾烈な銃弾の嵐を彼に向ける。

当然のようにボートは転覆し、彼は必死で沈みつつあるボートにしがみ付いた。

どのみち死ぬだろうということは彼自身も理解していたが、それでも本能は生きようと必死に死にかけの身体を動かそうとしている。その姿をどう見たのか　川岸の化物は銃撃を止め、ただ彼の溺れている姿を眺めていた。

そして　化物が森の中に消えたのと同時に彼の前が急に明るくなる。

周囲の温度が急激に上がり、黒い水に波紋ができる。

強烈な光は彼の視界を一瞬だけ遮断したが、徐々に眼が馴れてくると、頭上を先ほどの化物同様、まるで神話から出てきたかのような者が飛んでいるのが見えた。

「天………使？」

思わず、いま降りてきた少女とも、兵器とも　否、その二つの融合体とも言うべき存在に目を奪われた。

そう、天使だった。

鋼鉄で鎧われ、機械仕掛けの翼で空を飛び踊る天使。戦士の魂を集めると謂われる人工の死の天使。<sup>フルギョーレ</sup>

天使は背中の翼から火を噴き出しながら空中で静止し、ただ彼の事を侮蔑とも哀れとも取れる眼差しで見つめると、おもむろに手にしていたSVDを彼の顔の前に突き出した。

そこで彼はようやく理解する。

先ほど飛び上がったのはロケットではなく、この天使であり。

化物は、川岸にいる奴ではなく、この天使であったのだと。

そして それに気付いた瞬間、彼の脳髓に7・56耗×54R弾が飛び込み、彼の脳髓を頭蓋骨と一緒に粉々に砕いた。

## 序

戦争があつた。

人類至上最大で、最悪の戦争が。

戦争が起きた理由は定かではないが、かつて「大東亜帝国」とま  
で呼ばれていた皇国こくが本土列島にまで縮小された事を鑑みるに、皇  
国が力を持ち過ぎ、国際情勢を脅かすほど強大であつたからかもし  
れない。

何れにせよ、戦争が起こつた原因など誰も感心を持っていない。

それよりも眼先の問題 戦災という戦争の残した深い爪痕をど  
う治すのかという問題に関心は注がれている。

大戦中に使用された科学兵器の影響は臣民に深刻な被害を及ぼし、  
生まれてくる子どもの三割は奇形児か、あるいは何かしらの障害を  
持って生まれてくる。

大量破壊兵器は国土を蝕み、数年間その土地に生命を寄せ付けなく  
なり、戦死者などの戦災者の数は未だに判明しておらず、一説には  
数千万にも及ぶという。

幾度の決戦に皇国は疲弊していき、三年程前に戦争は国際連合と  
皇国との「講和」という形で唐突に終わりを告げた。

これにより皇国は東南亜細亜を国際連合に取り上げられ、これら  
の国は後に独立していく。

皇国は領土のほとんどを取り上げられたが、講和を受け入れた事  
で国際連合への参加を許可され、これにより驚異的な速度で戦災復  
興を行う事ができたが、これで戦争の爪痕が完全に治癒したわけ  
はない。

国際連合との講和を是よしとせず、皇国から独立し、かつて皇国の一  
部であつたユーラシア大陸にある「満州帝国」を拠点とし、国際連  
合と皇国を相手に戦い続ける旧皇国海軍。

連合に下る事を潔こたはしとせず、未だに徹底抗戦を掲げる反講和主義

者や、尊皇打倒を願う共産主義者とそれを支援する国際共産党。コミンテルン

さらに皇国宣伝省の宣伝放送を鵜呑みにし、連合と講和をした事を？裏切り？と感じた、政府への不信感を持った無政府主義者。アナーキスト

そして何より 大戦中、大量に投入された「装甲兵」の存在が皇国国内の治安を乱し、国内は戦後の混乱も加わって、所謂「魔女の鍋の底」状態になっていた。

旧皇国海軍のシンパや共産主義者は日常的にテロを繰り返し、戦後復興作業にあたる新生皇国陸軍だけでは、彼らを抑圧する事は不可能であった。

そこで新生皇国政府は、新たな組織を編成する。

その組織はテロ活動を行う犯罪組織を殲滅する為に行動し、常に視線を？外？に向けている軍隊と違い、その視線を？内？へと向ける、治安維持を担う組織 国家警察軍の誕生である。

国家警察軍は治安維持の為には、例えば味方であろうとも躊躇なく銃を向けるような、ある種病的な組織であり、中でも「特別高等警察」の対テロ部隊は「麁みはころしの強襲殲滅部隊」と呼ばれるほど恐れられる存在であった。

\*

国家警察軍隷下特別高等警察 通称「特高とっこう」について語るには、まず大戦中に開発された「機械化兵士」の存在について語らなければならぬ。

大戦中、皇国は兵力不足を少しでも行うため、とある計画を実行に移した。

又号作戦 通称「再生兵士計画」と呼ばれるソレは、戦場で負傷した戦傷兵を前線に送る返す為の計画であり、腕や足、そして内臓系統を失った兵に義肢あるいは人工内臓などの？欠損？部位を機械工学などで補い、負傷した兵士を少しでも多く前線に送り返す事を目的としていた。

当初、この計画は批判されつつも、手足を失った戦傷者達にはそれなりの好感を持って受け入れられた。なにせ脚を？がれ、立ち上がる事を許されなかつた者達が、再び立ち上がる事を許されたのだ。再び戦場に戻されるといふ恐怖はあつたが、同時に歓喜もあつた。

だがこの計画は、戦局が悪化していくと徐々に狂気を帯びて行く。軍部は兵士の質を向上させるため、？内殻？と呼ばれる身体強化装置を開発し、再生兵士計画で文字どおり？再生？した兵士達に内殻を装備する事によつて、再生兵士達は驚異的な身体能力を発揮するに至つた。

そして彼ら内殻を装備した再生兵士が予想以上の戦果を上げた事に気を良くした軍上層部（特に海軍が率先していたと謂われる）は、再生兵士の数を増やすために凶行を起こし始める。

レ号作戦　通称「機械化兵士作戦」と呼ばれるこの作戦は、文字どおり兵士を？機械化？させる計画であり、五体満足な兵士の手足を？ぎ、その代わりに強化四肢と内殻を装備させるという狂気の作戦であつた。

余談だが、レ号作戦で造られた兵士達　機械化兵士は自ら志願した者がほとんどであり、その練度も高かつた。

そして志願者が大半という事もあり、この計画そのものは大々的に批判される事はなく、機械化兵士に反対していた者達も大声で反対する事ができず、それが後にさらなる狂気を招く。

レ号作戦と並行して、内殻を装備した兵士のさらなる能力向上を目指した兵装、多目的装甲外殻　通称「装甲甲冑」が完成する。

この装甲甲冑は機械化兵士達の戦闘能力を向上に貢献し、装甲甲冑を装備した機械化兵士達は「装甲駆逐兵」と呼ばれ、機械化兵士推進派の数を増やしていった。

だが戦況が悪化すると共に、軍上層部は機械化兵士のさらなる高性能化を望むようになる。

そして、まるでそのニーズに答えるかのように、潜在的な戦闘能力向上を可能とする「戦闘潤滑液」が発見され、これ以降の機械化兵士にはソレの生成装置が装備される事となる。

この辺りから皇国軍は敵軍捕虜や敵国領民などを使用した、半自動的な行動をとる機械化兵士 装甲兵 の開発に成功した。彼らは部隊規模（中隊以上）で脳内の制御が行われ、完全に？兵器？として使用される事となった。

その後、とある部隊に配備された少年の装甲兵のデータから、成長ホルモン的一种が戦闘潤滑液生成を円滑にする事が判明し、これ以降、機械化兵士は異様なまでに若輩化の傾向に進んで行く。

さらに、ほぼ同時期にエストロゲン（俗にいう女性ホルモン）が戦闘潤滑液の濃度を高める事が判明したため、エストロゲンがもつとも多く分泌される思春期の女性が使用される事が多くなる。

これら女性型機械化兵士は「戦姫<sup>せんき</sup>」と呼ばれ、一般の機械兵よりも高性能であり、かつその容姿が敵兵に齎す心的ストレスは、彼女達の戦闘兵器としての価値を大いに高めた。

当初、戦姫の？材料？は前述したとおり、敵国領民だったのだが、戦況悪化とともに、徐々に？材料？の調達が困難になってくると、軍上層部は遂に自国民の少女にまで手を出し始めた。

これまで戦局悪化という現状を打開するために、今まで狂行を黙認していた反対派であったが、この狂気の行動に、遂に堪忍袋の緒を切らし、反対派の多かった陸軍の若手将校達や帝皇近衛兵などがクーデターを起こす。

彼らの行動で今まで戦争指導を行っていた前帝皇は処刑され、尚も戦争継続を謳う軍上層部の人間は一掃された。

このクーデターの成功を機に、新帝皇は対峙していた国際連合軍に講和を求め、皇国同様疲弊し切っていた連合軍はこの申し出を嬉々として受け入れ、戦争は終結した。

だが前述したように、海軍は皇国から離反。

この時に手放した、あるいは海軍のシンパに譲渡された装甲兵の多くは、制御が行われなくなった事によって？野生化？し、各地で猛威を奮う事になる。

軍はただちに暴走した戦闘兵の排除に乗り出したが、自分達で造り出した装甲兵達の性能は高く、皮肉な事に開発した自分達の流血によって、その性能の真価を証明した。

国内外の敵に対処しなければならぬ軍だけでは国内治安の回復は不可能であると判断した政府は、新たに警察庁など同等の権利を持った公安組織 国家警察軍を創設する。

国家警察軍は軍と同様の重火器を有し、特に初めから対装甲兵を視野にいれた「特別高等警察」は目覚ましい功績を上げた。

特別高等警察はテロリストをはじめとする、敵対する全ての勢力の撃滅を目的としており、その功績は目覚ましい物であったが、その行動の異常性も目立っていた。

「国家の治安の為なら上官にも容赦なく銃を向けよ」

そう教育された特別高等警察の警官達は病的なまでに敵を排除し、特に装甲騎兵や戦姫の排除を目的として編成された「装甲兵対策大隊」の隊員達の異常性は目立った。

大隊には「毒には毒を持って制す」の精神で、軍に保管されていた多量の装甲兵が貸与されており、彼らはその能力を持って敵対する全てを文字どおり撃滅していく。

「銃ヲ持チ立チ塞ガル者アレバ、是ヲ撃滅シ、ソノ部下、親戚、必要アラバ飼イ犬マデ、実力ヲ持チテ撃滅セヨ」

それが彼ら装甲兵対策大隊の 特別高等警察のモットーであり、大隊員達はこの教えを忠実に守り、国家に仇為す組織の者に「特高」と呼ばれ、まるで悪魔の眷族であるかのように恐れられた。

公立の小学校の前に数輻の白と黒に塗装されたスバル・レガシイ B4 俗にいう移動警察車と、マイクロボスのような形をした、機動隊を運用する為の特型警備車が止まっていた。

所轄の警官達は何れもミネベア9耗けん銃を握っており、機動隊の他員達に至っては9耗特殊銃 一短機関銃（MP5）と、機動隊の象徴ともいえるライオットシールドを構えている。

学校は完全に警官達によって囲まれており、その光景と雰囲気から、かなり緊迫した空気であるというのがヒシヒシと感じられる。そんな緊張を増幅させるかのように、学校の中から拡声器による要求が叫ばれていた。

『我々も犠牲は望んでいない。我々の要求を飲めば人質を無傷で解放する事を約束しよう！』

校内から放送されるソレは、いわゆる犯行声明であり、学校に立て籠もっている立て籠り犯による物である。

当然の事ながら、警官達は彼らに即応する為に周辺に展開しているのだが、犯人達は大勢の子どもを人質に取っているのをいい事に、先ほどから同じような犯行声明を何度も繰り返している。

本来であれば強制執行する所なのだが、如何せん人質の数が多過ぎ、周囲にいる警官達は二の足を踏んでいた。

『何度も繰り返すようだが、あと一時間以内に明確な返答がなければ、我々としても大変遺憾ながら ？』

突如として犯行声明の声が止まる。

そしてそれと同様に、周囲にいる警官達も息を呑んだ。

二つの勢力の目線の先には 側車に先導された、巨大な、

A P C が鋼鉄の駆動音を上げて警官達の中に入って行き、学校の前で停車した。

その場にいた誰もが、陸軍部隊の治安出動だと思ったが、装甲兵員輸送車に描かれている日章を見て、これらの車輛は全て警察の物であると、何とか理解する事ができた。

その装甲兵員輸送車に一輛だけ混じっていた装輪式の装甲車である、82式指揮通信車の扉が開き、一人の警官　　というよりも軍人という雰囲気を持つ女性が降り立った。

焰のような真つ赤な髪を一本に結び、黒い「特高」の制服を見事に着こなした妙歳の美女　　特別高等警察装甲兵対策大隊指揮官の杜氏椿姫警部である。

彼女の妙歳の女性特有の艶やかな顔を見た機動隊の隊長は、彼女の容姿に見惚れるのではなく、まるで悪魔でも見たかのように顔を引き攣らせた。

彼は本部から『対策部隊が来るまで現状を維持せよ』という旨の命令を受けてはいたが、その「対策部隊」というのは警察の特殊部隊である特別強襲部隊だと思っていたのだ。

しかし現れたのは特高の　　それも「塵の強襲制圧部隊」と呼ばれる、装甲兵対策大隊である。およそ人質救助には向かない集団であるのはみなまで謂わずとも解るだろう。

お偉方は一体何を考えているのか。

そんな彼の考えなど露知らず、椿姫は彼の前に立ち、見事な敬礼をして見せた。

「御苦勞警官。状況報告を」

彼女は簡潔に言つと、自分よりも頭一つ大きい巨漢の機動隊長を威圧するかのように、視線をしっかりと彼の眼に固定する。

彼女の威圧感に戸惑いながらも、機動隊長は精一杯の意地を保ちながら、あくまで機動隊長としての威厳を取り繕くろうとしていた

が、それが虚勢だというのは誰の目にも明らかであった。

「……本官は対策部隊が来るまで現状維持をするという旨の命令を受けておりますが、対策部隊の支援をせよという命令は受けておりません」

何とか抵抗の言葉を口にしたが、椿姫は微塵も表情を変えず、涼しい顔をしたままだった。

「組織は違えど、犯罪者の撲滅にあたるという志は同じ筈だ。

貴官の報告が無くとも作戦の準備は整っている。言いたくないなら構わんが、下手をすれば人質に犠牲者が出る可能性も大きくなるぞ？　？　貴官が報告をしなかったせい？　でな」

「さあどうする？　私はどちらでも構わんぞ？」

「……わかりました。わかりましたよ」

機動隊長は観念したとばかりに首を振ると、彼女を情報統制用の車輛の中に案内した。

「人質の数はおよそ五十名弱です。全員体育館に集められています。幸い犯人の突入が休み時間中だったので、多くの生徒が逃走に成功しましたが、逃げ遅れた生徒が人質になっています。あくまで確認が取れている数なので、もしかしたら他の場所にもいるかもしれない」

「確認が取れてない、か」

「逃げるのに成功した生徒の数を確認したところ、やはり何人か足りないという報告も受けています。あくまで本官の仮説ですが、万が一体育館を解放された場合に備えて他の場所にも人質を置いているという可能性が」

「予備か。随分と周到だな」

「犯人達が人質のいる体育館以外の場所も占拠している所から鑑みるに、仰有るとおり予備の可能性が高いかと」

「分散しているわけか。報告は受けているが、奴らの配置を教えてください。作戦の変更が必要になるかもしれない」

「総数は二十名弱と想定され、人質の密集している体育館に十人前後、校舎内に巡回している兵士が五名前後、各棟の屋上に狙撃手らしき者の確認もされています」

「ふむ……概ね事前報告どおり」

「装備はAKMやウージー、トカレフなど……典型的な革命主義者の装備です」

「コミンテルン国際共産党の支援を受けている連中か。露助も余計な事をしてくれる」

「要求は政治犯の解放　これも御馴染ですね」

「少しは捻りを入れて欲しいな」

椿姫は嘆息して情報統制車から降りると、腰に下げていた携行型トランシーバーを取って送信のボタンを押す。

「椿姫だ。作戦の変更は無し。事前計画どおり、最終勧告後に突入を開始しろ。送れ」

『各突入班、了解。送れ』

「事前計画どおり、最優先目標は共産主義者共の撲滅だ。人質の確保は？できれば？で良いが、なるべくなら援ける事を推奨する。その、なんだ。目の前で子どもに死なれると　なかなか堪えるぞ」

『……各班了解。送れ』

「各員の健闘に期待する。以上」

椿姫は携行型トランシーバーの回線を開いたまま腰に戻し、指揮通信車まで歩いて行き、拡声機のマイクを取った。

車輦の上に設置されていた拡声機から、椿姫の声が高々と響き渡る。

『アー、テスト。特別高等警察の杜氏椿姫警部だ。警官としての義務があるので確認はしておく。速やかに武装を解除し、人質を解放して投降せよ。繰り返し、速やかに武装を解除し、人質を解放しろ。大人しくお縄につけば幾分か罪は軽くなるぞ』

椿姫の言葉に、籠城犯は警官達に向けて銃撃する事で答える。武装を解除する気も、人質を解放する気もないらしい。

椿姫は呆れたとばかりに溜息を吐くと、再びマイクに語りかける。

「お縄につく気はない、と。誠に残念だ」

何故か口に笑みを浮かべつつ、椿姫の腕が高々とあがる。

それと同時に、音こそ聞こえないが、何か構えられる気配が周囲を覆う。

明らかに変わった空気に周囲の人間は騒然としたが、そんな事など気にせず、椿姫は高々と上げていた腕を勢いよく校舎に向かって下ろし

「抵抗確認。執行開始」

甲冑を着た悪魔達を解き放った。

警官達の上空をシュシュッと空気を摩擦する音が響き、その音を出していた主 迫撃砲L16の81耗砲弾が学校の各所に落下して爆発する。

それと同時に、他の場所でも何かが爆発したような爆発音が現場周辺に響き渡った。

人質を捕っている相手に砲弾をブチ込むなど微塵も考えていなかった 普通は考えないが 犯人達はその行動に狼狽したが、それに追い撃ちを掛けるように、装甲車の上に設置されていた三丁の二式12.7耗車載執行銃 ブローニングM2重機関銃「キャリバー50」 が咆哮を上げる。

凶器と化した二式車載執行銃はレンガを砕く程の威力を持った12.7耗弾を、毎分四五〇から五五〇発の連射速度で大量に吐き出し、窓を枠組みごと粉碎し、壁を砕きながら貫いて中にいた人間を肉塊へと変えていく。

人質の安否など微塵も考えていない銃撃に、その場にいた警官達

は狼狽したが、そんな事は意にも介さず、銃撃が終わると同時に甲冑を着た悪魔たちが校内に雪崩れ込む。

本来であれば、屋上に配置されていた籠城犯の狙撃手達が彼らを狙い撃つ筈だったのだが、その狙撃手達は既に特高の狙撃手によって、狙い撃つ事が不可能な状態に　　つまりは絶命していた。

「な、何を考えているんですか！　中には人質が　　」

「我々は？　銃を持ち立ち塞がる者あれば、是を撃滅し、その部下、親戚、必要あらば飼い犬まで、実力を持ちて撃滅せよ？　と指導されている。本館はそれを忠実に遂行しているだけだ」

みなまで言わずに、椿姫は機動隊長を突き放すと、指揮を執る為にその場を離れた。

現場指揮権のない機動隊長は特高の行動に口出しする事はできず、彼は歯噛みしながら、ただ人質達の無事を祈る事しかできなかった。

学校の何処かで響いている銃声は、彼のいる場所にもはつきりと聞こえている。

\*

漆黒の闇の中に、複数の黒い甲冑が身を纏めていた。

突入準備をしている隊員の手元を照らすライトだけが、この暗闇を照らす唯一の灯りであり、その灯りは甲冑の輪郭をぼんやりと映し出している。

彼らは全身を黒い特殊合金製と特殊樹脂製の多目的装甲外殻いわゆる「装甲甲冑」で覆い、顔には防毒面を装着し、黒くないのは、両眼に装備された暗視装置だけであり、異形の装甲甲冑と赤く光る暗視装置は、彼らを御伽噺に出てくる獣面人身の化物のような容姿にしていた。

そんな怪物達が文明の利器たる短機関銃を持っているのである。それだけ聞けば滑稽極まりない光景に思えるが、実際に見るとある

種の感情　言葉では言い表せないような恐怖心を覚えるような集団であった。

『設置完了。全員突入準備はいいか？』

一番前にいた甲冑が後ろの化物達に訊くと、皆一様に了承の意を示す。

『よし。合図があるまで待機するぞ』

甲冑の群の長がそう言うと、他の甲冑達は皆銃を構えたまま、その場に片膝を着いた。

『終戦から数年足らずで敵だった国の銃を使う……。現金なもんだ』  
そう愚痴りながら、一人の甲冑が手にした銃を弄ぶ。それを後ろにいた甲冑が嘆息しながら見た。

『仕方ない。確かに独逸の銃だが、ソイツはそれを棚上げにするだけの性能がある』

『まあな』

その場にいた甲冑達の手には、彼らが9耗特殊銃と呼称する短機関銃　MP5が握られている。

MP5はドイツのH&K社ヘッケラ&コックで開発された短機関銃であり、従来まで「撃つて当てる」ものであった短機関銃を「狙って当てる」ことを可能にした高性能銃であり、今回のような狭い空間　室内戦などではその性能を如何なく発揮する。

彼らの言つとおり、元々は敵であった国の銃であるが、その性能の良さから、少なくとも数が警察の特殊部隊に配備されていた。

『しかし……。神野しのの、お前は相変わらず拳銃ミネベアのみか？　こんな時くらい機関けん銃を装備してもいいだろうが』

甲冑の中で、神野と呼ばれた男だけは拳銃しか装備していない。

本来であれば全員装備を統一すべきなのだが、彼は『副兵装』という名目で、個人の自由で装備できる拳銃のみを装備をしていた。

『使い慣れない銃よりも、使い馴れた武器だ』

『じゃあ慣れるよ』

『ここのところ出動ばかりで訓練している暇がないから慣れようがないな。現場（じま）じゃ慣れる前に死ぬ。慣れる暇がないんだ』

『二人とも無駄話はそこまでだ』

一番前にいた甲冑達の班長が二人の会話を止めると、持っていた9耗特殊銃を掲げる。

『執行実包装填。装備の最終点検を行え』

暗闇の中で弾装の装填音と槓桿（コッキングハンドル）を鳴らす音が響き、各員が自分と仲間の装備を確認し合う。

ザツと雑音がして、今まで一般隊員には閉鎖されていた無線回線が開き、地上にいる椿姫の声が耳に響いた。

『各員の健闘に期待する。以上』

その言葉から一分と経たぬうちに、頭上　つまり地上で爆音が響き、ソレとほぼ同時に班長がC4爆薬の有線式起爆ボタンを押して、闇の二画を爆破させる。

爆破と同時に僅かに闇の中に灯りが差し込み、瓦礫が崩れ落ちる音が響く。

それに併行して、甲冑達が漆黒の闇（御加断）の中から学校内へ跳び出す。（現実）

正面からの迫撃砲による砲撃と、二式車載執行銃による掃射で完全に恐慌状態に陥っていた籠城犯達は、地下から出てきた彼らに対応する事ができず、抵抗する事もできずに逃亡して背後から撃ち抜かれるか、あるいは出会い頭に9耗拳銃弾の洗礼を受けて絶命した。『無線封鎖解除。こちら突入第三班。別棟一階の制圧完了。射殺五制圧者無し。送れ』

『こちら指揮本部。突入第一班が体育館確保で苦戦している。直ちに是の支援にあたれ。』

……気をつける、情報より連中の数は多いぞ。送れ』

『諒解。以上。』

いま言ったとおりだ。是より我々は別棟の制圧に当たる。佐藤と相原は殿を務める。神野、お前が先鋒だ』

『諒解』

班長の合図と同時に、神野と呼ばれた甲冑が前に出る。

彼は9耗けん銃 ミネベアP226R しか装備しておらず、火力的な面でいえば他の隊員に後れを取るが、小回りと準敏性に限って言えば小型な分だけ9耗特殊銃より多少は速い。

遭遇戦の起こり易い室内戦では少しでも速い方が有利なため、拳銃しか持っていない神野が奇襲に対応し易いというのと、単純に彼が先鋒を務められるだけの技量を持っているという理由で神野が班の先頭に立った。

周囲警戒を厳にしつつ、階段を上り、別棟の二階に上がる。

体育館と別棟は二階で繋がっているため、体育館を制圧する為には別棟の制圧が必要不可欠であり、突入第三班の責任は重大である。

『渡り廊下前に到達。……渡り廊下を通りますか？』

彼らの目の前には体育館に行く為の渡り廊下があり、いちおう先ほどの二式車載執行銃の銃撃で制圧されている事になってはいるが、彼らにはそこが安全だとは考えない。常に万が一を想定するのが、現場で長生きする為のコツだ。

『安全確認後、渡り廊下の前を通過して別棟その物の制圧を優先する。至近距離からの散弾銃ソートオフに注意しろ。幾ら〇九式でも一二番径の直撃には耐えられん』

『諒解』

確認どおり、六人の甲冑は渡り廊下の曲がり角まで進んで行き、神野は曲がり角から潜望鏡を出して、渡り廊下から体育館入り口を確認する。

『……障害物バリケードで姿は見えないが、危険な臭いがする』

『待ち伏せの可能性が高いな。上谷、四十耗で障害物を  
そう言い掛けた瞬間、彼らの後方にあつた数個のロッカーが勢い  
よく開き、中から銃を持った数人の兵士が現れた。』

『ッ！ 応戦しろ！』

兵士達の手には近代装備の成されたAKMが握られており、それ  
が甲冑達目掛けて掃射される。

彼らの装備している〇九式装甲外殻は、9耗けん銃程度の銃弾な  
ら難なく耐弾する事が可能だが、AKMのような突撃銃。それも  
対装甲目的の鉄鋼弾であれば話は別だ。

鉄鋼弾は鉛の弾芯である通常弾とは異なり、鉛の代わりにタンク  
ステン鋼を用いており、通常の銃弾よりも貫通力が高い。

幾ら特殊合金で造られた甲冑で覆われているとはいえ、自動車の  
エンジンブロックを撃ち抜く弾を防ぐ事はできない。そのため、甲  
冑達は直ぐに散開して遮蔽物に隠れ、兵士達に応戦する。

『クソッ！ 奴らただのテロリストじゃないぞ！』

明らかに軍事的な訓練を受けている兵士達の動きに、一人の甲冑  
が悲痛の叫びを上げたが、特高の隊員達の多くは元軍人であるため、  
その程度の敵に後れを取る事はない。

銃撃戦に入ってから三〇秒ほど経った時、後方からの挟み討ちを  
警戒していた神野は思わず狼狽した。

渡り廊下の先 体育館の前にある障害物の陰に、一人の兵士が  
あまりにも凶悪な武器を構えているのが見えたからだ。

『RPG！』

神野の叫びとほぼ同時に、件の兵士がRPG 対戦車ロケット

弾発射機　　の引金を引き、対人用の榴弾ロケットが発射される。

RPGに限らず、無反動に分類される携行型対戦車兵器は反動を相殺するために後方噴射を行うため、室内で撃つと射手その物が後方噴射した熱風で死ぬ事になるのだが、件の男はRPGを撃つ為に予め障害物後方に何らかの工夫を施したらしく、ロケットを撃つと同時に、何事もなかったかの如く、反撃から逃れる為に後方に下がって行った。

RPGから発射されたロケットは、甲冑達　特に神野目掛けて飛来して来たが、撃つ前にRPG存在に気が付いていたため、神野を含め他の隊員達は何とか爆炎から回避することに成功した。

だがRPGで直接狙われた神野は、回避する為に渡り廊下の向こう側　T字路の先に退避してしまい、他の甲冑達と大きく距離が離れてしまった。

そして神野と甲冑達の合流を防ぐ為なのか、体育館入り口に軽機関銃が持ち込まれ、牽制射撃が行われる。

こうなってしまうえば、もはや合流は不可能だ。

とはいえ、攻撃方向はロッカー側の一方向だけであり、神野以外の甲冑達がそちらの兵士達を仕留めてから、体育館入り口の敵を殺せばいい。現状はそこまで悪くない。

神野がそう考えた瞬間、やおらロッカー側の反対方向から銃弾が飛来する。

後方警戒をしていたとはいえ、少し目の前の銃撃に気を取られ過ぎたらしい。後方　本棟の方向から三人の兵士が短機関銃を連射しながら前進してきているのが見えた。

本来なら本棟担当の突入第二班が押さえ込んでいる筈だが、前進して来ている以上、そんな些末事は棚上げに上げる。

神野は9耗けん銃の照星を一番前の男に合わせると、引金を三度繰り返し引き、9耗拳銃弾を男に叩き込んだ。

9耗拳銃弾　9 x 19ミリ軍用弾パラベラムは名称どおり軍用の弾であり、その殺傷能力は必要に足る物だが、それでも充分に過ぎるとはいえ

ない。よって胴体部を狙つての三連射が兵士の心得だ。小さな急所よりも、大きく狙い易い箇所から重傷に至らしめる。それが基本であり、鉄則だ。

咄嗟の射撃であつたが、撃ち出された三発の9耗拳銃弾は男の心臓付近に命中し、三発の中の一発が心臓に命中し、心臓を穿たれた男はそのまま床に倒れ伏し、二度と顔を上げなかつた。

だが戦果に酔う間もなく、死んだ男の後方にいた二人が手にする短機関銃を掃射する。

○九式装甲外殻であれば、短機関銃から発射される拳銃弾が貫通する事はないのだが、銃弾が命中した時の衝撃は別だ。内殻を着用しているため、多少緩和されてこそいるが、それにも限度がある。

神野は牽制射をしながら一番手前の教室に入つて弾をやり過ぐすと、既に後方からの敵襲に気付いていた仲間の甲冑が二人の男に向けて射撃を開始した。

『神野、無事か？』

『どういうわけだか』

『お前が入つた教室から、体育館入り口を狙えないか？ 支援狙撃班からでは死角になつて撃てないらしい。あそこなら窓から見えると思うが』

『確認してみる。その間の掩護射撃は頼んだ』

『任せておけ』

拳銃を構え直し、室内の安全を確認しつつ窓際に進む。

『こちら突入第三班。別棟二階、渡り廊下付近の教室にいる。間違つても狙撃しないでくれよ。送れ』

『こちら支援狙撃班。諒解した。以上』

拳銃を構えながら、慎重に窓際に進んで行く。

室内に待ち伏せしている奴は勿論、体育館入り口にいる奴に気が付かれても問題があるからだ。

ふと、視界の端に何か小さいものが映る。

直ぐに一步後退しつつ、拳銃を音のした方向に構え

「ひっ……」

可愛らしい小さな悲鳴が室内に響いた。

見れば、教室の片隅にある机の下に、小学校低学年くらいの少女が身体を丸めて隠れている。

敵対勢力の殲滅が最優先と命令されているとはいえ、神野はこれでも警官であり、何より彼の精神構造からして、人質に取られている子どもを見過ごす事はできない。

神野はなるべく少女を怖がらせないに近寄ると、彼女の前で片膝を付いた。

『大丈夫？ 怪我はないか？』

神野はそう訊ねたが、少女はより一層怖がるばかりで、彼の問いに答えるどころか、逃げ場のない壁に後退しようと思死に足を動かす。

確かに自分の容姿 ○九式装甲外殻を装着した姿 は怖いと

思うが、ここまで怖がられる理由が解らない。

はて、と首を傾げた瞬間

バンツと、大きな発砲音が室内に響いた。

それと同時に、次弾を装填するためのポンプ音が室内に響く。

人質を囷にし、気を取られている隙に後ろから散弾銃ショットガンで奇襲するという計画を立てていた籠城犯はその企みを物の見事に成功させたのだ。

ただ、彼の計画と違つところは、撃った筈の人間が絶命しておらず、

少女を庇って取れた右腕も気にせず、残った左腕で彼の首を掴んで、その気道を完全に止めている事だけだ。

「……き……さま……装甲駆逐へ……い」

籠城犯は手にしている散弾銃フェザーライトで応戦を試みようとしたが、それよりも先に、神野の左腕が彼の首の骨を折ったので、彼は抵抗をする事ができずに絶命した。

「……大丈夫？」

神野は籠城犯だった物を投げ捨てる、何事もなかったかのように、とれた機械の右腕を拾い上げ、掴んだままの9耗けん銃を引き離して、左手に持ち直した。

その光景に少女はさらに怯えてしまい、少女の足元に水たまりができる。

「ゴメン。怖かった？」

神野は先ほどと同様に少女に語り掛けてから、

「ああ、そうか。無線で話しているわけじゃないから聞き取り辛いのか？」

そう独り言のように呟いて、無線機を操作して発声器を外部に切り変えた。

「これで聞き取り易いかな？」

甲冑に相応しい、錆びた声だった。

「こんなのが一応、警官だ。君達を救助に来た」

少しでも安心させる為に柔らかい口調で言うと、少女はようやく目の前の相手が化物ではなく、自分を助けに来た人間だという事に気が付いたらしく、先ほどのような恐怖の涙ではなく、安堵の涙を目に浮かべ、声を出して泣き始めた。

「怖かったね、もう大丈夫だから」  
「そう言っ頭を撫でようとした瞬間、」

ボシユンツと、嫌な発射音が体育館入り口方面から響いた。

一瞬だけ世界が暗転する。

鼓膜を突き破るような音が響き、破損した窓硝子が全身に襲い掛かり、赤い硝煙が室内を覆う。

凶器と化した机や椅子が空中を舞い、散弾のように壁を突き破っていった。

少女が見た光景はここまで。

それ以降は太く冷たい腕に抱かれて守られ、目を瞑っていた事もあって、少女視界は完全に閉ざされた。

室内を爆炎が襲った理由は単純明白である。

体育館入り口付近にいたRPGを持った男が少女の泣き声で教室に視線を向け、そこに神野の姿を認めため、RPGを撃つたからだ。

この時点で神野達は知らなかったが、籠城犯達は二つの勢力で構成されている部隊であった。

つまり共産主義を掲げるテロリストのグループと、国内を混乱させる為に大陸から派遣された海軍の工作員部隊である。

テロリストグループは彼ら工作員の事を国際共産党コミンテルンから派遣された同志だと誤認しており、工作員達は当然ながら自分達が海軍の間であるという事は隠していた。

工作員達はテロリスト達に武器と軍事教練を施して国内を混乱させる事を目標としており、今回の籠城作戦はテロリスト達の意向に沿って行われていたのだが、あまりにもテロリスト達の計画が杜撰であった為、彼らは仕方なく次善策 教練を施していたテロリスト達を放棄し、自分達は撤退するという計画に移っていた。

彼らにしてみればテロリスト達はただの捨て駒なのだ。そもそも海軍の連中の多くは右翼が多いため、極左であるテロリスト達の目

標が達成されるのはよろしくない。

今回の作戦は軍事教練の具合をみるために、捨てても惜しくないテロリスト達を投入したため、いざ撤退すると決まれば、突入している特高の隊員ごと吹き飛ばす事に躊躇はなかった。現に、神野に向かつて撃たれたRPGの弾頭は壁を貫通し、壁の向こう側にいた二人のテロリストを肉塊へと変貌させていた。

「……おじちゃん、大丈夫？」

いつの間に気付いたのか、少女が自分の事を庇ってくれた神野を氣遣っていた。

神野の身体　○九式装甲甲冑の一部は吹き飛んでおり、左足からはぶすぶすと煙を上げている。

傍目から見れば大丈夫な筈はないのだが、神野は何事もなかったかのように抱きかかえていた少女を離し、上体を起こした。

「ああ……大丈夫、生きてるよ」

そう言って、頭を叩きながら起き上ってから、神野は少女の顔を見る。

「……オレ、生きてる？」

どういう意図で訊いたのか少女には解らなかったが、とりあえず頷くと、神野は少女と一緒に庇っていた9耗愛銃けん銃を拾い上げる。

未だに周囲で銃声が響いていたので、神野はけん銃を構えながらとりあえずその場から離れる事にした。またいつRPGを撃ち込まれるとも限らない。

『……生きてるか？』

神野の姿を見た甲冑が不思議そうに彼の方に視線を向ける。

「不思議と。何がどうなった？」

『別棟は制圧した。さつき上谷が40耗グレネード榴弾ブチ込んで体育館への渡り廊下も制圧し終わった』

「オレがブツ飛ばされる前にやってくれよ……」

神野はヘルメットの上から頭を掻きながら愚痴ると、傍らにいる少女をなるべく自分の内側にくるよう促した。

「……負傷はその子のせいかな？」

「さあな。……終わつたみたいだぞ」

問答をしている間に、体育館から鳴っていた銃声が止み、全員の無線に突入した突入第一班の隊員の声が響く。

「こちら突入第一班。体育館の制圧に成功した。人質も過半数救助に成功したが、十二名死亡、三名重傷。我に損害はなし。犯人は死亡一七。残念ながら制圧者は出せなかった」

その通信とほぼ同時に、体育館の方向からパラパラララという音が響いた。

「こちら指令本部。犯人確保が出来なかったのは誠に残念だが、良くやった。周辺の警戒をしながら」

眼下の正門方向に向かつて、一人の男が見える。

どうも籠城犯の一人らしいが、武装はしておらず、校舎から逃げるように。否、実際に息を切らせて警官達の方に逃げていた。

彼は逃げるので必死だった。

眼前で起こった惨状に理解が追いつかず、とにかくその場から離れる事で精一杯だったのだ。

流石に警察の中にいけば助かる。

逮捕はされるだろうが、それでも命だけは助かる。

そんな事を考えながら、脇目も振らずに息を切って奔っていたから 眼前の光景が何を意味しているのか理解するのが遅くなってしまう。

そしてそれはまさに？致命的？だった。

「撃て」

椿姫の良く透き通る綺麗な、そして冷酷な声が響く。

銃弾はまるで嵐のようだった。

前から。

後ろから。

頭上から。

そして超遠距離から撃ち出された大量の銃弾は、たった一人の間目掛けて襲い掛かり、既に絶命した男に滑稽なダンスを躍らせる。銃撃は男の肉が削げ、内臓が零れ落ち、骨が砕けても尚続き、男の原型がなくなり、椿姫が、

「撃ち方止め」

そう言うってから一秒と経たぬうちに、ようやく銃声は止んだ。

銃撃の痕には無残な？籠城犯だった？肉塊が転がっており、その肉塊の上を、特高の衛兵班の人間が通り過ぎていく。

？麿の強襲殲滅部隊？ 周囲に警官達は、ようやくその言葉の意味するところを理解した。

彼らに警察の常識は通用しない。

彼らは警官ではなく、何か別の戦闘組織なのだ。彼らは彼らの使命 「銃ヲ持チ立チ塞ガル者アレバ、是ヲ撃滅シ、ソノ部下、親戚、必要アラバ飼イ犬マデ、実力ヲ持チテ撃滅セヨ」という使命を忠実に守り、その為ならば人質を盾にする籠城犯や、武器を捨てて逃げる人間にも容赦なく引金を引く。

仮に、その相手が？他の組織？の者であっても、彼らは容赦なく殺すだろう。

つまりはそういう連中なのだ。

機動隊長は何故こんな連中を派遣したのか、最初は理解できなかったが、今ならば明確に理解できる。

上層部<sup>うっへ</sup>の連中は、最初から人質を救助する気などなかったのだ。

故に彼ら「麿の強襲殲滅部隊」を派遣し、彼らはその使命どおり、犯人達を「実力を持って」撃滅した。

「国家権力に立ち向かうと皆殺しになるぞ」という、見せしめの為に。

中にいた籠城犯と、彼らに人質にされていた児童達をスケープゴートにして。

理屈は解る。

徹底的に潰して他の犯罪者達に警告をし、今回のような事件が再発する事を 国家と国民を憂いた故の行動なのだろう。

だが彼には、それを理解する事も、支持する事もできなかった。普通の神経の持ち主であれば、それが当然であろう。

しかし特高の連中は違う。彼らはその命令を嬉々として受け入れ、何の抵抗も無しにその命令をやつてのけた。

機動隊長から見ても解る。

彼らは、国家や国民の事を憂いてなどいない。

ただその使命に従って、目の前に立ち塞がる者を皆殺しにしているだけだ。

そんな者達のお陰で国家の平穏は守られている そう考えると機動隊長は何故だか自分達警官という存在が少し情けなく感じられた。

そんな機動隊長や他の警官達の心境など微塵も気にせず、椿姫は指揮通信車の中で今回の作戦の報告を受けていた。

「三七名死亡、一名重傷、人質は現在確認中ですが、過半数が死亡」

「相変わらず杜撰な奴らだ。？できれば？助けると言ったのにな」

「それと……突入第三班が人質の救出に成功するも、一名負傷」

「なに？ 誰だ？」

「えー……。神野亜志郎上等巡查です」

「またあいつか。撤収準備完了後、指揮車の前まで出頭させる」

「諒解」

「神野亜志郎上等巡査。出頭しました」

現場の処理が終わり、犯人達の遺体收容や人質の收容などが一段落すると、右腕の失った黒甲冑が82式指揮通信車の前で立つと、踵を合わせ　は左足が負傷しているののでできないため、直立姿勢を取って、椿姫に失くななった右腕の代わりに左手で敬礼した。

「報告は聞いた。人質に気を取られて、後ろから散弾銃ソドオフによる奇襲を受けたらしいな」

「はい」

「そのうえ人質を庇って右腕が使用不能になり、その後のRPGから人質を守る為に装甲甲冑まで台無しにしたそうだな」

「はい」

椿姫の言葉を肯定するように、神野の来ている装甲甲冑はあちこちの装備が外れ、特に損傷の酷い左足は内殻まで吹き飛び、中身

神野は機械化兵士なため義足　が見えている。

「なぜそのような行動をとった」

「人質の救出を優先したからです」

「……装面を取れ」

命令どおり、神野は化物防毒面の皮を顔から取る。錆びた声と黒い甲冑に似合わぬ、少年のような顔立ちをした、黒髪黒目の典型的な日本男児であった。

「歯あ食いしばれ！」

その言葉と同時に、椿姫の右手が神野の頬をスパンツと綺麗な殴打音を響かせながら平手打ちした。

女性の平手打ちといえば可愛らしく聞こえるが、椿姫は軍歴のある女性である。

倒れこそしなかったものの、口の端から一筋の赤い液体が垂れ、神野の右頬は真っ赤に腫れあがった。

そして追い打ちを掛けるように、もう一度スパンツという音が響く。

「頬を殴られたら、反対側の頬を出せ？という軍隊時代の癖が無意識に出た結果である。」

「室内の安全確保ができていないにも関わらず意識を人質に向けて散弾銃の奇襲を受けた上に、戦闘中に戦闘要員以外の人間を庇って負傷する　莫迦か死にたがりのする事だ。一体何を考えてるッ！」

「お言葉ですが警部。奇襲を受けたのは自分の油断に因るものであり、本官は如何なる処分を受ける覚悟であります。」

しかし　本官は人質を庇ったという判断を間違いであるとは思いません」

神野の言葉に、椿姫の表情がさらに怒気で染まる。

「貴様、いま何と言った？」

「本官の判断は間違いではない、と」

「念の為に訊いておくが……我々の使命はなんだ？」

「？銃を持ち立ち塞がる者あれば、是を撃滅し、その部下、親戚、必要あらば飼犬まで、実力を持ちて撃滅せよ？です」

「そうだ。それが我々の使命だ。けして人質を救出する事ではない」

「しかし本官は警官です」

「いいや違う。装甲兵対策大隊の兵士だ。」

いいか、私達の任務は単なる警備や捜査ではない！　我々が相手にしているのは気紛れな犯罪者でも、糞くだらしないシマの奪い合いをしているヤクザ連中でもない！　目的の為ならどんな汚い手も平然とこなせるだけの強靱な意志力を持ち、重火器を使用するだけの技量を持った、犯罪者としての負い目なんぞ持ち合わせていない、そついうテロリスト共だ！

これは奴らと我々の戦争だ！　お前が油断すれば相手に殺される！

何で殺されたのか解らない大間抜けとしてだ！　それが嫌なら自分が警官である等と思つな！」

一気に捲し立てる椿姫の前に、しかし神野は静かな声で自分の意

志を口にした。

「それでも、本官は警官であります」

静かに、しかし力強く呟いた神野の言葉に、椿姫は息を呑み、目の前の純然たる？警官？の顔をまじまじと見つめた。

「……何故だ？ 戦場で四肢を奪われ、この世の悪辣を見てきたお前が、何故そこまで警官である事にこだわる？」

「本官はあくまで、国家を守る者であるからです」

椿姫はしばし無言のまま、神野の言葉を吟味するように彼の顔を見直した。

黒い髪に黒い瞳。少年のような顔立ちは端正に見えるが、その表情に纏わりついた、何か暗いモノ。苦悩、という名の傷の顕現がその容姿全てを暗鬱なものに変貌させている。

椿姫はしばしの間、神野の顔を見つめ、神野もまた、その黒く暗い瞳で彼女の顔を見ていた。

そうして、どのくらい時間が経ったのか 椿姫は観念した

ように嘆息すると、神野の顔から目を逸らした。

「お前がそこまで言うなら、今回の件については少し考えよう。処分は後日言い渡す。今は直ぐに装備を纏めて撤収しろ」

「諒解しました」

神野が敬礼するのを見定めると、椿姫は彼に背を向けて去ろうとし 足を止めた。

「神野二等陸曹」

背を向けたまま、椿姫は口を開く。その声はまるで何かを憐れむような響きが籠っている。

「私がお前の意見を聞くのは、お前がかつて私の部下だったからだ。そこを 履き違えるな」

彼女の言葉に、神野は頷き、再び左腕を斜め45度に曲げた。

「諒解しました。椿姫二等陸佐」  
神野の言葉に、椿姫は満足そうに頷くと、現場の事後処理の指揮を執る為に早足でその場を去っていった。

帝都の某所には警視庁本部があり、その建物の一画に特別高等警察の本部は置かれていた。

警視庁の建物内ではあるが、そこには特高以外の警察官は近寄ろうともせず、その一画だけまるで別の世界であるかのような錯覚を受ける。

特に機械化対策大隊の大隊長執務室付近は「鬼門」と呼ばれて畏怖されており、仮にこの部屋の向こう側に用事があったとしても、わざわざ一周して避けるほどだ。

その「鬼門」こと大隊長執務室で、神野は直立姿勢を保ったまま、彼の持ち込んだ報告書に目を通して、椿姫を見ていた。

先日、負傷した右腕は未だ未修理のまま、中身のない袖がだらしなく垂れているが、左足はスベアの簡素な義足に変えてあり、直立姿勢をとる事も苦では無い。

むしろ彼女の書類を見る鋭い眼の方が、神野には何故か痛かった。静寂しきった部屋には木製の執務机と、報告書で埋まった本棚しがなく、その他には何も無い。

装飾の類を好まぬ椿姫らしい部屋ではあるが、何も無い部屋には者音が反響して聞こえ、椿姫の書類を捲る音も幾分大きく感じられる。

仮にも帝都　首都の一画にある建物であるため、外の喧騒が室内にも響いているが、それがやけに遠く感じるの、あるいはこの部屋が、庁舎の奥まった場所にあるからかもしれない。

「……報告書は読ませてもらった。良く書けているな」

書類を机に投げると、椿姫は「誉ほまれ」と書かれたパッケージを開け、一本煙草を取り出すと、口に咥えた。

「その右腕が取れたのが人質を庇ったせいだというのも、〇九式が吹き飛びかけたのも人質のせい、か」

煙草に火を点ける。

「交戦規定を破り、人質救出を優先した。その事に関して文句を言いたいのには山々だが、警視総監直々に責めるなという通達されているから言わないでおこう」

紫煙を天井に噴き上げる。不作法ともいえる行為であるが、椿姫が行うと、妙に絵になる光景であった。

「……特殊突入小隊に転属を希望しているらしいな」

「はい」

「志望動機は」

「……………」

「知っていると思うが特殊突入小隊は海軍隷下の機械化兵士や、暴走した装甲騎兵および戦姫を殲滅する事を目的としている。その修羅の道に敢えて身を投じる理由はなんだ」

「戦うためです」

「警察であらんとするお前が何故戦う」

「戦わなければならないからです」

「何と戦わなければならないのだ」

「無論、国家を脅かす機械化兵士や装甲兵達と」

「もう一度訊く。なぜ突入小隊に志願する」

神野の問いを、椿姫が疑問で押し返す。なぜテロリストや海軍兵士ではなく、機械化兵士と戦わなければならないのか、と。

負けるわけにはいかなかった。

実際のところ、神野自身もなぜ突入小隊に志願したのか、その明白な理由を持っていなかった。

だが 突入小隊でなければならぬ。敵は自分と同じ装甲兵でなければならぬのだ。

「神野亜志郎上等巡查。もう一度訊く」

呪文のように、椿姫は繰り返す。

「なぜ突入小隊なんだ」

神野は答えなかった。

否、答えられなかった。何故なら、彼自身にもそんな理由など解らないのだから。

何も答えず、ただ立っているだけの神野に雷鳴のような声が轟いた。

「亜志郎ッ！」

「呪われた運命と戦う為に」

静かな、それでいて力強い言葉が部屋に響く。

しばし沈黙が流れ、室内には庁舎前の道路を走る車の音だけが反響する。

外の喧騒がやけに遠く感じるのは、あるいはこの部屋が、庁舎の奥まった場所にあるからかもしれない。

「……呪われた運命と、戦う為に」  
無意識に口にてた、自分の言葉を繰り返し呟く。  
なぜ戦うのか。

そう問われれば「警官としての執務」である、と答えてきた。

それが警官である自分の矜持であり、国家の治安を守る者として当然の義務であるのだから。

だが　いま自分の口から出た言葉は、他者を助ける事を第一とする警官としてのものとは程遠いものだった。

他者の為に戦うのではない。

自分の為に戦うのだと。

「……………」

呆気にとられているのは、神野だけでなく、目の前の妙歳の美女も同様であった。

彼女の事は戦時中の時から知っているが、こんな表情をしている彼女を見るのは初めてである。

「呪われた運命と、戦う為に……」

いま一度、同じ言葉を繰り返す。

それが何を意味しているのか。

そんな事は自分にも解らない。何故なら、それは今まで自分の中で抱いた事もない感情であるからだ。

「それがなぜ突入小隊なんだ」

驚愕から立ち直った椿姫が、真つ正面から神野を見据える。

灰皿の上に置いた煙草は、既に全て灰になって落ちていた。

「わかりません」

「わからない……。それでも戦うと」

「はい。だからこそ戦うのです」

嘆息してから、椿姫は背凭れに背中を預ける。

そして、しばし間を置いてから卓上のインターフォンのスイッチを押すと、何処かに声をかけた。

「戸隠とがくれをココへ」

隣室に控えていた椿姫の副長　つまり機械化兵士対策大隊の副隊長が入室し、椿姫の横に立つと神野に向かって踵を鳴らし、敬礼をした。

神野もそれに応え、返礼をする。

当然の事ながら、副長　戸隠里とがくれりお桜警部補と神野は面識がある。

何せ自分の所属している部隊の副長なのだから。

戸隠警部補は一本に結んだ黒髪を持つ美女なのだが、険の強い眼をしており、隙無く着込んだ黒い制服も手伝って、大方の色事師は口説き文句を引っ込めるだろう。

「戸隠、彼の転属手続きをしてくれ。神野、書類その物は後で戸隠に便宜しておくから、今日中に書類を書き上げて提出しろ」

「ありがとうございます」

自分の意思が通った事に、思わず安堵の溜息を零す。

「その前に」

立ち去る準備をしていた神野に、椿姫は言葉を続ける。

「直ぐに第三技術研究室に行け」

「第三技術研究室？ なぜですか？」

「行けば解る」

まだ質問は残っていたが、椿姫がそれで問答は終わりとはかりに立ちあがったので、神野は仕方なく踵を合わせ、左手で敬礼をしてから退室した。

神野の足音が遠ざかるのを確認すると、戸隠は椿姫の傍らに移動し、囁くように顔を近づけた。

「……よろしいのですか？」

「不満か？」

「動機そのものが転属と関係のない、個人的なものですし、何よりこういう解決のしかたは隊長らしくないと思います」

「そういうな……。あいつの目を見たか？」

「は？」

「あれは 捨てられた狗の目だ」

「捨てられた、狗？」

椿姫の言葉の意味が解らず、戸隠は首を傾げた。

「それが 何か関係が？」

「あれは軍に捨てられ、国に捨てられ、世間にすら捨てられた野犬だ。放置するには危険すぎ、さりとて一度捨てられた狗に首輪は付けられない。」

いいか里桜、仮に奴を転属させなくとも、奴は何処にあるか解らない、呪縛から解き放たれる手段を探し続ける。戦いという手段を用いてな」

椿姫が煙草を咥え、戸隠がそれに火を点ける。

「突入小隊に答があると信じているのなら、そこに送るのが最良だろう。自分で望んだ場所だ。幾ら送られる先が地獄だとしても、奴は喜んで飛び込む」

「しかし突入小隊の死亡率は酷く高いです。それで死ぬ事になっても？」

「奴が死んで誰が哀しむ？ いや、奴がそれを奴が望むと思うか？ 死すら受け入れ、その死を嘆く者もない……。これほど突入小隊に相応しい人間はそういないだろう」

「……何故、突撃小隊でなければならぬのでしょうか」

「においても嗅ぎつけたのだろう」

「おい？ なんのにおいです？」

しばし間を置き、紫煙を天井に吹き上げながら、椿姫は遠い眼で虚空を見つめ、独り言のように呟いた。

「……同類のにおいかもしれないな」

第三技術研究室は本庁の地下に造られた、国家警察軍直属の技術研究所である。

国家警察軍技術研究局の研究内容は多岐にわたるが、この第三技術研究室では主に機械化歩兵 主に戦争末期に造られた装甲兵や戦姫についての研究が行われている。

装甲兵は名前こそ有名であり、その戦闘能力についても声高に宣伝されていた為に、軍人から一般市民にまで知られた存在であったが、そもそもは軍用の兵器である。そのため軍機の壁に守られた装備をした末期の装甲兵達については謎が多く、このような技術研究が行われているのだ。

機械化兵士という言葉は、じつに曖昧な物である。

本来は両手両足を失った兵士に義肢を装着させた者の総称であり、その定義であれば機械化兵士は吐いて捨てるほどいる。

だがそういった者達は本来の名称である機械化兵士とは呼ばれず、一般には「再生兵士」と呼ばれている。

一般に謂われている機械化兵士とは強化義肢を装着した上に、さらに内殻と、装甲外殻と呼ばれるオプションパーツを付けた、一種のサイボーグのような存在である。とはいえこの定義は一般市民のものであり、軍の定義では「装甲駆逐兵」だとされる。

神野で例えると、強化義肢しか付けていない平時は？機械化兵士？、任務中などの有事に○九式装甲外殻を装備した状態になると？装甲駆逐兵？と認識されるのだ。

そのため、装甲駆逐兵を見つけるのは非常に困難である。

装備を付けなければ？装甲駆逐兵？であると認識されないため、いざ事が起こってからでないと断定できないのだ。

故に装甲兵対策大隊の対策はいつも後手に回ってしまい、大抵の場合、死傷者が出てからの出勤になってしまっている、というのが実状である。

とはいえ、彼ら装甲駆逐兵が事件を起こす事は少なく、彼らはむしろ大陸に渡った海軍による非公式作戦に従事している事が多く、その相手は皇国軍が行っているの、装甲兵対策大隊が出動するような場面は少ない。

問題なのは、大戦末期に造られ、そのほとんどが謎のベールに包まれていたままの機械化兵士達 装甲兵および戦姫達である。

この二つの定義も曖昧な物だ。

世俗では戦争末期に造られた装甲駆逐兵を装甲兵と呼び、その女性を全て戦姫と呼んでいるが、実際は大きく異なる。

そもそも女性の装甲兵は、あくまでも？女性の装甲兵？であり、戦姫とは根底から違う。

あくまでも軍の定義であるが、装甲兵や戦姫は機械化兵士のように

に戦傷した者を再度戦線に送り返す？再生兵士計画？とは全く無縁の存在であり、軍の意向によって脳を弄られ、身体を？がれ、戦闘用に改造された者の事をいう。

つまり始めから戦闘の為に義肢と装備を着けられた者であり、成長ホルモンと女性ホルモンで作られた戦闘潤滑液で血を沸騰させて戦う、人権など微塵も存在しない、まさに？戦闘機械？の事だ。

当初は人権保護団体などが彼らの存在を擁護したが、彼らの本性を知るにつれ、彼らを擁護する者はいなくなった。

戦争によって身体と青春を奪われ、戦争が終わってもその存在を許されない。それが彼らの定義　装甲兵の定義だ。

「君が神野君？」

第三研究室に入室すると同時に、眼鏡に白衣という、絵に描いたような研究者が神野に走りよってきた。

「随分と身長高いね。一九〇糶センチ？　〇九式付いたら巨人みたいになるんじゃない？　右腕はどうしたの？　前回の作戦で負傷？　それは酷い。え？　左足も？　あら。よっぱど酷いミスしたんだねえ」  
白衣は一気に捲し立てながら、神野の身体を検分するように周囲を周り始める。

「いまだとき黒髪黒瞳なんて珍しいね。生まれつき？　それはもつと珍しい。」

戦中は何処にいたの？　満州？　海軍だったの？　違う？　ああ、関東軍か」

白衣は神野の周囲を二、三周すると、ようやく神野の前で立ち止まった。

「突入小隊技術主任の霧森きりもりです。よろしく」

霧森は馴れ馴れしい自己紹介しながら神野の手をブンブン振りながら握手をすると、再び捲し立て始めた。

「君の転属理由は椿姫さんから聞いてるよ。何か凄く浪漫溢れる…」

…っっていうのかな？　ともかく突拍子な理由には違いはないか。

でもいいと思うよ。うん。ここは戦闘狂とか変人の集まりだからさ、君みたいな人は目標を持っていてる人は珍しいわけ」

「まあ……そうでしょうね」

神野はそう言いながら霧森を見て「なるほど」と一人で納得した。「特に君と組む子は極度の戦闘狂だから。気を付けてね」

霧森はそう死刑宣告に近い言葉を言いながら、ニコリと微笑んだ。

戦時中、装甲兵などで編成される「装甲突入小隊」は、三機一班を最小単位として運用されていた。

一機を主力とし、残りの二機は主力機の支援に回る。

主力がやられた場合は、支援機がその装備を引き継ぎ、他の兵力が不足している班と合流し、再び三機一班に戻る。

彼らはその最期の一兵が死ぬまで不死身の存在だったのだ。

だが戦争が終わり、彼らが特別高等警察に配備されると、彼らを取り巻く情勢は大きく変わった。

特高は警察軍ではあるが、いわゆる？国軍？とは根底から異なる。

国軍は文字どおり国が運用する武装組織であり、警察軍はあくまで警察という組織を強化しただけに過ぎない。

その虚実はともかく、体裁上は「警察」である特高は、軍と同様の装備をする事は許可されておらず、そのため配備されている装甲車などの重機の性能は軍のソレよりも大幅に低下させられている。

装甲兵を運用する突入小隊でもソレは例外ではなく、？小隊？と名打ってこそいるものの、その実数は小隊　皇国軍では三〇名前後　の半数にも満たない。

技師などを合わせれば軍の小隊と同数になるのだろうが、正面戦力が一五名にも満たないのでは、全国の装甲兵対策を行うことなど不可能である。

椿姫はこの問題を解決する為に四苦八苦している様子だが、体裁

以上に予算の問題があり、未だ問題解決には至っていないようだ。

「椿姫くんから聞いたよ。君、装甲駆逐兵だつて？」

霧森は何の躊躇いもなく聞き難い事を言ったが、神野も特に気にせず頷いた。

装甲駆逐兵であるという事は、四肢がないという事を意味する。

戦争中にそういった者達が多かったとはいえ、戦後になれば、それがタブーになるのは当然だ。

だが神野にとって、その程度の悪意無い発言など慣れたもので、目くじらをたてるようなものではなかった。

「主任」

「なに？ きみ予想よりも声が低いんだね。さっきまで声が小さかったから気付かなかつたよ。あと突入小隊では僕は？ドクター？つて呼ばれているから、それでよろしく」

「ではドクター、本官が組む事に装甲兵とは？」

「ああ、やっぱりそうきたか。そうだね。ある意味、君に近いけど、おそらく最も遠い存在だ」

遠回しな発言に神野が首を傾げると、霧森は一人何か納得したかのように「うん」と頷いた。

「彼女は極度の戦闘狂だ。それも人とはなくて、装甲兵と戦う事を喜びとしている。」

「わかるかい？ 君のような？必要な戦闘？ではなく、文字どおり殺し合いを望んでいる、そういう子だ」

「彼女」という事は戦姫、ですか。確かに戦闘分泌液の後遺症で戦闘狂になる事が多いと聞きますが」

「うん。ただどね、彼女はそういう次元じゃないんだ。彼女は戦姫という存在ができた以前から戦う事を望んだ人間で、戦姫になって

以来、常に前線で戦い続けてきた」

「戦姫が出来た当初から。では、敵性国民ですか？」

「その単語はもう死語だよ。」

彼女は純粋な皇国の人間で、真の愛国者 だった」

「だった？」

「講和、という形で戦争を終結した新政府に幻滅して、あとは自暴自棄」

「徹底抗戦派？」

「さあね。彼女、聞いても何も言わないし、興味のある人間もいない」

「いない？ なぜ？」

「ココにいる以上、徹底抗戦になる気はなかったから、かな？ 戦えれば個人の心境なんて割とどうでもいいんだよ」

戦闘狂と変人しかいなくなるわけだ。

「さて……彼女と接するに当たって、注意事項が三つある」

霧森はそう前置きを置いてから、一つの扉の前に立って神野の顔の前に指を二本突き出し、一本ずつ折りながら注意事項を言っていく。

「まずその一、身長の話は絶対にしない。仮に彼女が手の届かない場所にある物を取ろうとしても、彼女が？取って？というまで取ってはいけない。かなり機嫌を損ねる。」

その二、彼女は人に触れられるのを極端に嫌っているから、容易にボディタッチはしない。握手も厳禁。

そしてその三、これが一番重要だ」

霧森はそう言うってから、それまでの不抜けた表情から一転して、真剣な顔で神野の顔を見据えた。

「寝ている間に撲殺されなくなかったら、彼女にSVD以外の銃を推奨してはいけない。ドラグノフを侮辱する事もだ。死活問題だから、これは絶対に忘れないでくれ」

「ドラグノフ、ですか？」

ドラグノフ狙撃銃。

エフゲニー・F・ドラグノフが開発した、セミオート式の狙撃銃であり、1963年にソヴェイエト連邦軍に正式採用が決まった、今では旧式ともいえる銃である。

細く長い銃身を持ち、中央部に大きな穴を空けた銃床が特徴的で、AKシリーズに近い外観を持つ。

分隊の支援用に一丁装備させられる、分隊狙撃兵用の銃であり、精密狙撃能力よりも速射性と信頼性に重きを置いた銃であり、有効戦闘距離は600メートルとされている。

7.62耗×54ラシアン弾と呼ばれる強力なライフル弾を使用し、現在では旧式となされているが、それでも著名な狙撃銃である事に変わりはない。

旧式でこそある物の、確かに優れたライフルであり、それを愛用するのは解らなくもない。  
だが

「なぜ敵性国家の銃を？」

ドラグノフはロシア製　つまり連合軍側に加担していた国の銃である。

直接の戦闘こそしていなかったものの、それでも敵性国家の銃を持つことを容認していたとは考えにくい。

「鹵獲品だよ。敵性国家が使用する銃の性能評価という名目で、一部の部隊は使っていたそうだよ。武器不足を補う、というのが本音だったみたいだけどね」

「それをいまだに」

「そういまだに」

「弾や部品などはどうしているのですか？」

「民間で仕入れているみたいだから、それを使ってるんじゃない？」

「じゃない……って」

「いつの間にか彼女が調達してくるんだよ。まあ、民間品以外にも、兵隊時代の残りや押収物から調達してるんじゃないかな」

「横領じゃないですか!」

「ココじゃ気にする人はいないよ。結果が全てだから。」

それより 姫との御対面だ。さっき言った事を忘れないように

晒うような口調で霧森が言い、わざとらしい仕草で神野を部屋の中に誘った。

暗い、そして狭い部屋である。

神野が部屋に足を踏み入れると、木製の扉はゆっくりと音をたてながら閉まっていき、扉が完全に閉まると部屋の中は完全な闇に閉ざされた。

まるで化物の部屋に餌として容れられたかの様な錯覚に陥りながら、神野は部屋の中心に立ち 自分の組むべき相手の名前を教えて貰っていない事に気が付いた。

今まで気付かなかった自分も自分だが、それよりも霧森が何も言わなかつた事の方が気掛かりだ。

あくまで勘であるが、霧森は意図的に名前を教えなかつたのだらう。

その意図は解らないが、ともかく相手の名前も知らないのでは、呼ぶ事もできない。

霧森の話から察するに、相手は相当凶悪な人物だ。

それがどんな容姿をしているのか、いや、そもそも本当に自分と組んで大丈夫なのか。

そんな事を漠然と考えていると、

「……誰? ドクター?」

小さく、しかしよく耳に響く少女の声が部屋に木霊した。

漆黒の世界　灯りのない部屋であるにも関わらず、その少女だけは何故か闇から浮き上がって見える。

無造作に切られた繭のような真っ白な髪、戦姫特有の中性的な顔立ち、暗くて目元はよく見えなかったが、瞳だけが灯籠のように爛々と赤く光っている。

装備を身に付けているのか、耳元には兎の耳のような索敵および通信に使われるアンテナが付いており、生き物のように前後左右に動いており、神野の一拳一足に反応している。

身体は内殻　それも防刃程度の能力しかない薄手の、映画に出てくる身体に密着するスパイスーツの物を纏っており、装甲兵と呼ばれるような装備は腰と足にしか身に付けておらず、両腕は強化義手を剥き出しにしていた。

子どものような背の低さに反して、身体の線だけは女性のソレであり、彼女が少女であるという事を示す記号になっている。

だが　そんな容姿の全てを棚上げにしてしまうような装備を、彼女は身に付けていた。

肩幅よりも広く、まるで蝶のように、鳥のように、羽ばたくかのように開閉するソレはまさしく？翼？であり

「……誰、あんた」

綺麗な、兎のような可憐さを持った少女はその羽を威嚇するように広げ、敵意を剥き出しにした。

これが突入小隊に入った黒甲冑と白兎の話し。

後に切っても切れない仲になる、翼のある兎との出逢いだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7708s/>

---

戦姫の翼

2011年6月14日10時25分発行